

# 野村万作 野村萬齋

第五回

## 狂言会 塩尻

〈番組〉解説 中村修一

小舞田植 野村裕基

文荷 野村万作

千切木 野村萬齋

文荷

千切木



撮影:政川慎治

2024.11.30(土)

開場 13:15 / 開演 14:00

会場:レザンホール大ホール

入場料:全席指定(税込)4,000円(未就学児入場不可) 主催:(一財)塩尻市文化振興事業団 / NBS長野放送 後援:塩尻市 / 塩尻市教育委員会

お問い合わせ

### Raisin Hall

〒399-0738 塩尻市大門七番町4-8  
TEL.0263-53-5503 FAX.0263-54-1103

プレイガイド:レザンホール TEL.0263-53-5503  
WEB:<https://www.raisin.or.jp/reserve/>  
一般発売日:8/4(日) 10:00~

※混雑を避けるため、発売初日の窓口販売はしていません。  
電話・WEB予約をご利用ください。



番組

解説 中村 修一

小舞 田植

野村 裕基

狂言 文荷

太郎冠者

野村 万作

狂言 千切木

太郎

野村 萬齋

休憩 十五分

主 岡 聡史

次郎冠者 高野 和憲

後見 飯田 豪

地謡 深田 博治

中村 修一

飯田 豪

内藤 連

当屋 深田 博治

太郎冠者 月崎 晴夫

立衆 中村 修一

内藤 連

飯田 豪

妻 野村太一郎

後見 岡 聡史

あらすじ

文荷(ふみにない) 太郎冠者と次郎冠者は、主人から少人(稚児)に宛てた恋文を届けるよう命じられる。二人は道々文を押し付け合うが、なかなか進まないで文を竹竿に結び二人で担ぐことにする。能「恋重荷」の二節を謡いながら運んでいくと、何故か文が重く感じられる。どうしても中身が気になると、二人は文を開けてしまい…。能「恋重荷」をパロディにした狂言です。太郎冠者次郎冠者が息を合わせて文を担ぐ場面は、小気味よい掛け合いに加え謡曲をも取り込み、興味あふれる内容になっています。

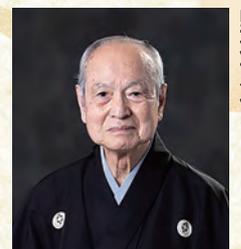
千切木(ちぎりぎ)

連歌の会の頭(当屋)になった男が、太郎冠者に会の仲間を呼びに行かせる。皆が集まって歌を考えていると、仲間はすれにされた太郎がやってくる。自分を呼ばなかったことに腹を立てた太郎は、当屋の家の掛け軸や花に難癖をつけこきおろす。怒った人々は、太郎を打ちのめし放り出してしまふ。事件を聞きつけた太郎の妻は、しづる太郎にむりやり棒を持たせ、仕返しに行くよう叱咤激励するのだが…。

出演者プロフィール

野村万作(のむらまんざく)

1931年生。重要無形文化財各個指定保持者(人間国宝)、文化功勞者、日本芸術院会員。2023年文化勲章受章。祖父・故初世野村萬齋及び父・故六世野村万蔵に師事。早稲田大学文学部卒業。「万作の会」主宰。軽妙洒脱かつ緻密な表現のなかに深い情感を滲ませる、品格ある芸は、狂言の二つの頂点を感じさせる。国内外で狂言普及に貢献。ハワイ大ウシントン大では客員教授を務める。狂言の技術の粋が尽くされる秘曲「釣狐」に長年取り組み、その演技で芸術祭大賞を受賞したほか、紀伊國屋演劇賞、日本芸術院賞、松尾芸能賞、紫綬褒章、坪内逍遙大賞、ベストフアザー賞、朝日賞、旭日小綬章、中日文化賞、ジャパソネットエッセイ賞等多数の受賞歴を持つ。月に憑かれたヒエロ「子午線の祀り」「秋江」「法螺侍」敦山月記名人伝「等、狂言師として新たな試みにもしばしば取り組み、現在に至る狂言隆盛の礎を築く。近年では、「樞山節考」の再演に取り組み、大きな成果をあげている。



野村萬齋(のむらまんざい)

1966年生。祖父・故八世野村万蔵及び父野村万作に師事。重要無形文化財総合指定保持者。東京藝術大学音楽学部卒業。「狂言こころ乃座」主宰。国内外で多数の狂言能公演に参加、普及に貢献する一方、現代劇や映画「レビッドラマ」の主演、舞台「敦山月記名人伝」「子午線の祀り」能狂言「鬼滅の刃」「ハムレット」など古典の技法を駆使した作品の演出で幅広く活躍。現在の日本の文化芸術を牽引するトップランナーのひとり。現代に生きる狂言師として、あらゆる活動を通して狂言の在り方を問うている。94年に文化庁芸術家在外研修制度により渡英。芸術祭新人賞、優秀賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、朝日舞台芸術賞、紀伊國屋演劇賞、毎日芸術賞、中野也賞、読売演劇大賞最優秀作品賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞、松尾芸能賞大賞、2024年5月坪内逍遙大賞を受賞した。石川県立音楽堂アーティスト・クリエイティブ・ディレクター。東京藝術大学客員教授(公社)全国公立文化施設協会会長。



野村裕基(のむらゆうき)

1999年生。野村萬齋の長男。祖父野村万作及び父に師事。能楽協会会員。3歳の時に「親猿」で初舞台後、子方として国内外で多数の舞台に出演。修業を続け、「三番叟」「奈須与市語」を披き、「万作の会」の若手狂言師の一人として舞台を勤めている。

